

「徒然草」と「四季物語」

稲田 利徳

「四季物語」が鴨長明の真作ではなく偽書であることは、これまで主として年中行事などの起源の不審などから論及されてきた。本論考では、さらに夥しく現存する「四季物語」諸本の書写年時や奥書に着目したり、「徒然草」と「四季物語」とが類似する行事や表現などに検討を加えることにより、「四季物語」は「徒然草」よりも遙か後の成立であることを論証し、さらに「四季物語」は「徒然草」から多方面にわたる記事や表現を享受した作品であると位置付けた。

Keywords : 徒然草・四季物語・鴨長明・偽書・享受

はじめに

「徒然草」第百三十八段には、「鴨長明が四季物語にも、『玉だれに後の葵は留りけり』とぞ書ける」と、鴨長明の「四季物語」の引用がみえる。

一方、鎌倉時代の成立とされる「本朝書籍目録」^{〔1〕}には、「四季物語 四巻 鴨長明作」とあり、兼好が繕読したのは（それが果して、長明の真作かどうかは別として）、この「目録」の指示するものと同一作品であつたろうとする見解が有力である。

しかるに、現存するものに、長明作とする「四季物語」が二種ある。一つは「歌林四季物語」と書名する、貞享三年の刊記を有するもので、主として板本として流布するもの、もう一つは、それとは内容を異にし、為定・雅世などの奥書を有する、写本として流布している「四季物語」で、ここでは仮りに前者の刊本系、後者を写本系と称しておく。

この刊本系と写本系とは、四月の条に、「徒然草」で引用された「玉だれに後の葵は留りけり」を一首の和歌に仕立てて掲示しているが、両作品に関連があるのは、その程度であり、両系統本は別個の「四季物語」である。果して刊本系がどのような性格を有するものか、また写本系との成立の先後関係など問題が存するが、それらは今後の課題とし、ここでは「徒然草」との影響関係からみて注目される、写本系「四季物語」を専ら考察対象とする。

ところで、この写本系「四季物語」をめぐるのは、従前から(1)長明の真作か

偽書か、(2)偽書とすれば成立はいつか、「徒然草」以前か以後かなどの諸問題が提起されている。

「四季物語」を味読すると、先述した四月の条の「玉だれに後の葵は留りけり」だけでなく、随所に「徒然草」と関連する記事、近似の思想、酷似した表現などを見出す。このうち、幾箇所かは、従前の「徒然草」の注釈書にも指摘されているが、「徒然草」と「四季物語」との作品の成立の先後関係が明確になつていないため、単なる指摘で終わったり、なかには「徒然草」が「四季物語」の記事や表現を参照、摂取したような見方をしているものもある。

けれども、「四季物語」は、これまで長明の真作でなく偽書との見解が有力であったが、それだけでなく、成立は「徒然草」よりも遙かに後であり、むしろ「徒然草」を意識し、その自然描写や思想などを摂取している作品と思量される。

この立場で論及したもののには、すでに島内裕子氏の「『四季物語』と『徒然草』」^{〔2〕}がある。この論考は、両作品の類似記事を二十箇所ほど指摘、対比し、

岡山大学教育学部国語教育講座 七〇〇一八五三〇 岡山市津島中三一一一
 “Tsunezuegusa” and “Shikimonogatari”

Toshinori INADA

Department of Japanese Language Education, Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tushima-naka, Okayama 700-8530

結論として、『四季物語』は、『徒然草』の享受から生まれた作品ではないかと「徒然草」の享受作品として位置付けている。

現存の写本系「四季物語」が「徒然草」より後の成立で、むしろ「徒然草」を享受した作品であるとの見方には、大方、賛同するものである。ただ、島内論文には、「四季物語」の研究史、「四季物語」の諸本などの言及がなく、さらに「四季物語」が「徒然草」をどのような態度で摂取し、偽書作成に援用しているかの手法の問題、指摘された以外にも享受の痕跡もあるなど、まだ残された課題も多い。

長年、「徒然草」と「四季物語」の関連を追究してきた立場から、ここに改めて両作品の諸問題を、総括的に考察しておきたい。

一 研究史

「四季物語」に関する論考は、従前にも幾篇か存するが、作品の内容的、本質的な問題に触れるものは少なく、諸本研究なども、専ら長明の真作か偽作かを論及するものが中心であり、偽書説をめぐって、一つの研究史を辿ることができる。

「四季物語」が長明の作とみると疑問の存することは、夙く江戸時代からなされている。賀茂真淵は偽書とし（縣居問答書）、各務支考なども「本朝文選」の序で、長明作でないとしている。また「四季物語」の諸伝本の識語や添紙などにも、不審を記したのものもある。例えば、彰考館本「四季物語」には、安藤為章が「偽書せる物と見へたり」（正徳二年春）などの添紙を貼付してある。

一方、尊経閣文庫には、元禄・享保頃に、前田家と諸方との書状往復を録した「書札類稿」があるが、その中に、前田綱紀より飛鳥井中納言殿に宛てた書状に、「右御所持被候恩借仕度令存候其内家長日記四季物語深秘抄於関東往々流布候得共皆以偽書御座候」と「四季物語」などを偽書と断じている由である。⁽¹⁾

このような江戸時代の断片的な臆測ではなく、近代になって本格的に偽書説を展開したのは、岡田希雄氏「鴨長明四季物語偽書攷上・下」⁽²⁾であった。

岡田論文は、「四季物語」が偽書であると考えられる論拠を七点ほど提示しているが、そのうち主要なものを挙げて紹介しておく。

(1)「さいつころ父みまかりし比、思ふことありてよめる歌に、今よりは死出の

山路ぞいそがる、せめても親のあとをつぐやと」とあるが、長明は早くに父を亡くしている（二十歳以前）、「四季物語」は日野山隠遁後の執筆とすると、その父に死別した時を記すに当り、「さいつころ」という言い方は不審であること。

(2)六月の条に「嘉祥（定）の祭」の行事のことが記されているが、嘉祥の祝儀に関する記録を辿ると、最古の記録は「実隆公記」の永正四年である。これで見ると嘉祥（定）の祝儀の行われたのは、永正を去ること余り遠く無い頃であったと考えられる。嘉祥（定）の起源が室町時代の中期であったとすると、その祝儀を古い時代からのものと信じて記述しているものが、長明の時代に出現すべきものでないこと。

(3)四月の条の、賀茂両社が大和国葛城郡高鴨から、天武天皇六年に京都の地に移されたと記すが、このことは全く国史にその所見がないこと。

(4)四月の条の、中の酉の行事も国史や有職故実書に見当たらないこと。

岡田氏は、以上の論拠その他により、「四季物語」は偽作であり、成立は室町中期以前までは遡れないのではないかと推測する。

次に小川寿一氏「四季物語について」は、雑誌「ぐんしょ」⁽³⁾に六回にわたって連載された、諸伝本の調査にも目配りした、長大な論考である。

小川氏は、刊本系の「歌林四季物語」にも触れ、「歌林本は、只単に偽書とのみ片付去るよりも、それが長明の上に占めている位相をよく考えて見たい」と慎重な態度で偽書説を保留している。また写本系「四季物語」に関しては、岡田氏が偽書説の論拠として列挙した七つの不審に対して、逐一検討を加え、いずれも偽書とする決定的な事項はないこと、長明は徹底した考証家ではないので、その「程度」の認識不足などもありうることを前提に作品に対処すべきだとされる。そして、逆に長明の筆致に相応しいところを列挙し、「四季物語」の作者を長明とすれば、文芸論的な面を有する「無名抄」より以前の作品と考えねばならないことなども考慮し、結局、「以上によって、四季物語の著作年時は、大原山の小野の炭竈を思い浮べつつ、承元二年に定めた新住居の日野外山の庵室で四季を送った後、承元三年以後、恐らく建暦元年秋九月卅日関東へ出立以前、と推測される」と論定された。

小川論文は、このように要約すると「四季物語」偽書説を批判し、長明の真作であることを積極的に提起しているようにも受けとられるが、全体の論調はそうではなく、必ずしも偽書とは断定できないこと、もし真作であるとすれば、

どの頃の成立であろうかといった、あくまで仮説のなかでの成立時期の論定である。

次に、浅野日出男氏「鴨長明四季物語偽書説をめぐって」⁶⁾も、岡田氏の偽書説の再検討である。

特に、岡田氏が記録を博搜して論及した「嘉祥の御祝」につき、それが「鈴鹿家記」の応永六年六月十六日の記事により、永正頃より百年以上も遡れることを指摘、他の偽書説の論拠にも再検討を加え、長明自身の手になる可能性もなきにしもあらずとし、かつ「為定本作者は真の長明をかなり正しく把握したうえで作りあげたよう思われる。後世の人間としても、鴨家に親しい者が長明の内実を知っていた人物だったと思われる。それも長明の時代からあまり離れていない時代の人物だったのではなからうか」と推測する。さらには、「四季物語」は偽書説を離れて、随筆文学として考察する意義があるとの提言も行っている。

以上の「四季物語」の研究史―それは偽書説を中心とするものであるが―を辿ると、江戸時代の当時から断片的に唱えられていた偽書説を受継し、岡田希雄氏が幾つかの不審点を列挙し、長明の真作でないことを論及されたこと、ただ氏自身も自覚されていたように、その論拠は、いずれも決定的な事項ではなかったこと、それに対し、小川氏、浅野氏が再検討を加え、偽書と断定することに慎重をきいたということになる。そして、小川氏などは、長明作の可能性もあること、浅野氏は長明作でないとしても、長明の内実を熟知した人物の手になる、長明の時代に近い頃の成立ではないかと推測している。

ただ以上の論考では、「四季物語」が偽書としても、成立時期の面で「徒然草」との前後関係が明示されていない。「四季物語」の成立は、もともと本格的に「徒然草」と比較、検討することによって、自ずから明らかになってくると思うが、以上の諸論考はその方面の論及が稀薄であった。

次に注目される論考は、中村幸彦氏の「白太夫考―天神縁起外伝―」⁷⁾と「擬作論」⁸⁾である。この二つの論文は「四季物語」を考察の対象に据えたものではないが、ともに「四季物語」の成立や性格に、極めて示唆的な発言がなされている。

中村氏は、古い天神縁起には全くみえず、傍系の天神縁起物に、いつの頃から加わってくる奇しい人物白太夫に着目する。そして、北野の白太夫についての最も古い記事は、伝鴨長明「四季物語」二月の条の「白たゆふ延勝とかも

のせしは、伊せの神人たりしが、これをさへおなじよしにたうとめり」だとする。だが、本書が長明の著述なら、平安朝末まで遡るが、白太夫を追ってゆくと思いがたく、これは「菅家瑞応録」などが出た頃（室町末頃）、その内容の話が世間に知れわたった頃の記事ではないかと推測される。

その他、京の年中行事を記す七月の条に、

「北斗に火を手向らるるなど、宮古の内の山々異やうの見物なりしか。年々におこなはる、事なれど、わきておしうおもひなされぬ。こゝの山里にても猶此ことわざはまねびて里のあげまいとみなすもおかしかりけり」とあるのは、早く「日次紀事」の大文字の送火のことと見当がつくが、この行事は「伝言室町家繁栄日、為遠望之觀使^レ点^レ之、故一条通為^レ当面依^レ之」(日次紀事)とある以上に時代を遡れない。それを真似た「こゝの山里」とは、上賀茂の社に近い松崎の妙法の文字のことだろうかと推測、また六月末の「嘉祥喰の行事」も、「日次紀事」「民間年中故事要言」「滑稽雑談」の後代の書に、もう少し新しい発生説を示しているが、その方が有力であるとする。

このような論拠によつて、中村氏は、結局「四季物語」の作者は、賀茂社に關係のあった神道家で、「徒然草」などを熟読した人物の手になるものであるうこと、その成立は「徒然草」より後であることはいうまでもなく、如意ヶ嶽の七月の送火の行事が、義政將軍以降という説によると、「四季物語」の成立は、西紀一四〇〇年の後半以後とならうかと提言する。

中村氏の「擬作論」の提起は、「須磨記」「撰集抄」「四季物語」などは、これまで「偽書」と貶まれてきたが、その見方を転換し、むしろ、「四季物語」なども鴨長明の名を借りた「擬作」という肯定的見方にならば「年中行事と京都の四季のうつりかはりを叙し、時に鴨の長明の心境を想像したり、時に『徒然草』の筆致を模倣しながら自己の考証らしいもの、歌壇評や新しい風俗の紹介まで加えてゆく。著者としても楽しい書き物であつたらうし、同好の人ならば、読んで又楽しいものであつたはずである」⁹⁾と「偽書」でなく「擬作」という執筆姿勢で作品をとらえ直すことを提言したものである。

この「擬作」の立場で「四季物語」をとらえ直す視点は魅力的である。が、ここではその点には深入りせず、とりあえず従前のような「偽書」という呼称で記してゆく。

この中村説で重要なことは、「四季物語」は「徒然草」より後代の成立であり、むしろ「徒然草」を熟読し、時にはその筆致などを模倣しながら執筆した

とする見解である。

この見解が妥当であることは、後に「四季物語」と「徒然草」を具体的に詳しく比較することによって、自ずから明瞭になることだが、ここでは、この見解に特に注意を喚起しておきたい。

最後に、石純姫氏の「多変量解析による『四季物語』の考察」¹⁰という特異な報告を紹介しておく。

従来、「四季物語」の真偽が問われるとき、史実との対照による考証がなされてきたが、この論文は、数量的文献の方法により、コンピュータを用いた文体分析を行ない、作者判別に援用したものである。

詳細な処理方法と数値は先の論文に依らねたいが、長明作の「無名抄」「伊勢記」「発心集」「方丈記」、それに「四季物語」を、各々に文体分析した結果、「四季物語」と他の長明の著作との間には、数量的差異があり、それは、同一作者による成立年代や題材、執筆態度の違いによる文体の相違とは、質的に異なるものであることを示していること、つまり、「四季物語」と長明の著作との間に示された文体の差は、作者が異なる場合に生じたものと考えられ、従って「四季物語」は、鴨長明とは別の表現主体に依る作品とみるのが妥当であるとする。

以上、「四季物語」の偽書説を中心とした研究史を辿ってきたが、私は、基本的に、「四季物語」は長明の真作ではなく偽書であること、しかも、その成立は「徒然草」よりも遙か後であり、「徒然草」を熟読し、所々にその表現などを摂取している作品、いわば中村幸彦氏の見解を妥当と考えるが、そのことは、「徒然草」との具体的な比較を行うことによって、自ずから見通しがつくと思う。

二 諸本の流布状況と書写年時

次に写本系「四季物語」の諸本の流布状況や書写年時を概観しておきたい。

「四季物語」の諸伝本に関しては、夙く小川寿一氏が、先掲の論文で二十余本を調査し、系統分類も試みている。その後、諸本を博搜し、さらに詳細に系統分類を行ったのは、浅野日出男氏である。氏は、先に触れた「鴨長明四季物語偽書説をめぐって」¹¹で、調査した伝本五十八本を一覧表にしていたが、その後「『四季物語』諸本の系統（上）（中）（下の二）（下の二）」¹²で、各伝

本の書写奥書・識語などを分類の基準に据え、本文校合も加味し、第一類八条宮智仁御自筆本系、第二類西川嘉長書写本系、第三類忍鑑子本系、第四類度会正身本系、第五類藤原敷淵本系、第五類入江昌喜本系の五系統に分類している。

けれども、その調査報告、分類、校合結果をみると、「四季物語」は、ある一本から発生したもので、所々に誤記や誤脱があるといった程度の差違にすぎず、成立過程に示唆を与える伝本とか異本と称すべきものは見出されていないといつてよい。

諸本の数は、個人蔵本を含めれば、恐らく百本を遙かに越える多数の写本が現存するものと予測される。しかも諸伝本の書写年時をみると、すべての写本が江戸初期頃から後期にかけて書写されたものばかりであり、この時期に、多くの知識人の関心を集めた作品であったことが如実に察知される。「四季物語」に対する、このような関心は、単に、この作品に記された年中行事の知識を得るためだけではないと考えるが、このことは今後の課題である。

私も、長年にわたり、折りあるごとに「徒然草」との関連で、「四季物語」の伝本調査を遂行してきたが、一番の関心事は、夥しく現存する写本の書写年時であった。どんな古写本が現存するのか、もし、鎌倉時代や南北朝頃の古写本が現存すれば、それは偽書説や成立問題、「徒然草」との先後関係とも当然絡まってくるからである。

それには写真版などではなく、一本一本原物を直接手に取って、書写年時を確認する必要があるが、これまでに所々に所蔵される「四季物語」の写本を七十余本程調査した。が、遂に南北朝期どころか、室町中期頃の古写本もなく、ほとんど江戸初期頃から後期にかけての写本であった。

『國書総目録』にも「四季物語」の写本の所在を六十余本ほど揭示しているが、その中では住吉大社本の「室町末期写」が注意される。ただこの写本は『住吉大社御文庫貴重圖書目録』で、三好長慶自筆を思わせる解説を付しているが、実際に原物に当たってみると、室町末期頃までは遡れなく、江戸初期写と思われる。中村幸彦氏も元禄前後の書写かとする。¹³

ところで「四季物語」の諸伝本のはほとんどは、次の為定・雅世・長慶の三つの奥書を有している。七十余本のうち、この三つの奥書のないもの、あるいは為定・雅世だけで長慶の奥書だけを欠くものは、後述するように、合わせても五、六本にすぎない。このこと自体、「四季物語」は一本から派生し、大同小

異の伝本群であることを如実に示唆している。

その三つの奥書を『鴨長明全集』（底本は東北大学狩野文庫本）によって摘記しておく（諸本により、多少の文字異同があるが、今はとわない）。

右一部十二巻者、鴨長明所撰之四季物語也。日々月々雖求之、被箱中、被封於藏裏、无入手裏。偶依懇望之、自官庫潜取出之写之畢。今度之撰中之規模、宝用有之而已。尤可秘者也。

応安元年戊申十一月十六日 藤原為定写之

長明四季物語十二巻、我家之袖玉。不可越之者也。尤永可伝秘本也。

永享十年九月下旬 中納言藤原雅世 書印

南大路長明四季物語十二冊、自仁和寺御門主、依御恩荷拝写之、亦他日以官本令校合、備再写者也。我文窓之重財不可如之。案長明之筆痕多、是写清紫二女貫業二仙之詞花者歟。是可謂抽梵骨焉。雖然詞原章段出不詳、讀之如失途。後学補之、最多幸云尔。

永禄元年十二月上旬 三好伯陽軒長慶 写書

以上が三つの奥書だが、今後の説明の便宜のため、為定のを「奥書①」、雅世のを「奥書②」、長慶のを「奥書③」と略称することとする。

偽書説の立場からすれば、この奥書自体にも不審な点が存する。奥書①の藤原為定は、恐らく歌人の二条為定を想定しているようだが、彼は延文五年（一三六〇）に死没しており、応安元年（一三六八）は没後八年経過しており、「四季物語」を写することはありえない。また、奥書②の「中納言藤原雅世」は、飛鳥井雅世を想定しているようだが、「公卿補任」によると、永享十年は「権中納言」で「中納言」ではない。奥書③は後述するが、この奥書①②なども、「四季物語」の作者が当初から捏造して書き加えていた可能性がある。奥書①など、「四季物語」を長年探求して、やっと入手したとか、奥書②も「我家之袖玉」などと、異常なほど作品を珍重している所にも、その気配が感じられる。これが正鵠を射たものとすれば、「四季物語」の成立は、永享年間よりはかなり後のことと推測されてくる。

次に、写本に直接当たって調査した「四季物語」の諸伝本を、書写者、書写年時などを中心に紹介しておく。詳細は浅野論文に依りたいが、氏が調査して

いないものもかなり含んでいる。

この作業の目的の一つは、書写年時を通した「四季物語」の流布状況の概観であり、それは同時に偽書説の状況証拠と遠いところで関わってくるものであるろう。

紹介の順序は、系統分類ではなく、江戸初期（慶長・元禄頃）、江戸中期（宝永・天明頃）、江戸後期頃（寛政・慶応頃）の書写を順番の一応のめやすとしたが、書写奥書のないものもあり、推測によるもので、その先後は確定的なものではない（所蔵の下の方の数字などは、図書整理番号を示す）。

(1) 東京大学総合図書館本（南葵文庫）（四二八七）

袋綴横本写本一冊。奥書①②のみ。書写奥書はないが室町最末期頃書写か。

(2) 陽明文庫本

大和綴写本二冊。一冊は「歌林四季物語」。近衛家澂筆。江戸初期写。

(3) 陽明文庫本（近・シ・二二五）

袋綴写本一冊。冒頭に「八条桂光院知忠親王自筆本」の件あり。巻末に「元禄丙子八月二日 完戸与一光加筆」。江戸初期写。

(4) 住吉大社本

袋綴写本一冊。元禄頃書写か。

(5) 宮内庁書陵部本（一五四・四五）

袋綴写本一冊。江戸初期写

(6) 神宮文庫本（三・四一八三）

袋綴写本一冊。巻末に「元禄十二年巳卯初春中旬、年齢七十七、西川嘉長之書」

(7) 稻賀敬二氏本

袋綴写本一冊。巻末に宝永二年閏四月二十四日付の三好長堅の書写奥書。

(8) 広島大学図書館本

袋綴写本一冊。冒頭に(3)と同じ知仁親王御自筆本の件。奥書①②③がない。岡崎暫住只且が宝永八年（一七二一）夏に書写。

(9) 水府明德会彰考館本（已三七下）

大和綴写本一冊。正徳二年（一七二二）春の安藤為章の識語。江戸中期書写。

(10) 実践女子大学図書館本（常磐松文庫）

袋綴写本一冊。正徳三年（一七一三）閏五月九日付の賀茂縣主清茂の識語。江戸中期書写。

(11) 国立公文書館内閣文庫本（二〇四・六五）

袋綴写本一冊。元禄十二年の西川嘉長、宝永七年（一七一〇）四月五日の中臣祐字の書写奥書。正徳三年の賀茂縣主清茂の識語。

(12) 大東急記念文庫本（四三・五・三三八八）

袋綴写本一冊。奥書③の右肩に「イ本此奥書ナシ」と注記。最後に「右京権大夫賀茂縣主清茂」の半丁にわたる長い識語。江戸中期書写。

(13) 今治市河野美術館本（三三一・六二五）

袋綴写本一冊。宝永七年の中臣祐字、正徳二年の梅月堂宣阿の校合奥書の後に「同第四十二月日以宣阿手書之本於燈下馳筆訖 三善政胤」。正徳四年十二月の書写。

(14) 今治市河野美術館本（三三一・六二六）

袋綴写本一冊。正徳五年五月十九日の書写奥書。

(15) 龍谷大学図書館本（〇二二・五八一・一）

袋綴写本一冊。享保元年（一七一六）十一月十四日の「玉泉の末流隠士忍鎧子」の書写奥書。

(16) 今治市河野美術館本（三三一・六二七）

袋綴写本一冊。「八条桂光院親王之御自筆本」の件。享保七年（一七二二）八月二十二日の書写奥書。

(17) 神宮文庫本（一八七〇）

袋綴写本一冊。「八条桂光院知忠親王之御自筆之本」の件。巻頭に「貞享二乙丑十月廿六日之夜書写早」とあるが、巻末の享保十五年夏の書写。

(18) 実践女子大学図書館本（黒川文庫）

袋綴写本一冊。享保十九年九月十七日、藤原佳豊の書写奥書。

(19) 無窮会神習文庫本（三九八八）

袋綴写本一冊。「享保十三戊申五月下旬 日下部景衡」の識語に続き、享保十九年（一七三四）十月の永尾玄起の書写奥書。

(20) 今治市河野美術館本（三三一・六二三）

袋綴写本一冊。奥書①②だけで③を欠く。享保頃の松岡怡顔の書写とする。

(21) 神宮文庫本（一八七二）

大和綴写本一冊。元文三年（一七三八）四月の花翫庵道澄の書写奥書。

(22) 東京大学文学部国文研究室本（中世四一・三一）

袋綴写本一冊。「八条桂光院知忠親王之御自筆本」の件。元文三年陽月六日に起筆、八日に書写したとの源義堯の奥書。

(23) 青山学院大学日本文学研究室（九一四・四二一・K一・九）

袋綴写本一冊。宝暦三年四月（度会正身）、宝暦五年八月（度会末雅）の書写奥書。裏表紙に「右者荒木田久老の本を以て人をして写さしめつ 琴雄」。

(24) 蓬左文庫本（堀田文庫）

袋綴写本一冊。延享四年（一七四七）四月（宇都宮尚綱）の書写奥書について、宝暦九年（一七五九）閏七月二十七日付の堀田知之の書写奥書。

(25) 大阪府立図書館本（石崎文庫）

袋綴写本一冊。寛保三年（一七四三）十月付の谷川士清の書写奥書について、明和年間の大河内重平の書写を記す。

(26) 青山学院大学日本文学研究室本（九一四・四二一・K一・六）

袋綴写本一冊。「元禄丙子八月二日」の識語。天明二年（一七八二）六月二日の書写奥書。

(27) 実践女子大学図書館本（常磐松文庫）

袋綴写本一冊。奥書①②③の各々の後に、「愚考ルニ」などと書写者への識語。江戸中期頃写か。

(28) 実践女子大学図書館本（常磐松文庫）

袋綴写本一冊。江戸中期頃書写。

(29) 慶応大学図書館本（一一六・八八・二）

袋綴写本二冊。「宝暦五乙亥年八月十一日鶴鶴軒藤原敷淵書」の識語。江戸中々後期書写か。

(30) 神宮文庫（三・四一九二）

袋綴写本一冊。江戸中期頃写。

(31) 蓬左文庫本（二・三五）

袋綴写本一冊。江戸中期頃書写。

(32) 東京大学総合図書館本（南葵文庫）（E二六・一〇七三）

袋綴写本一冊。江戸中々後期書写か。

(33) 青山学院大学日本文学研究室本（九一四・四二一・K一・三）

袋綴写本一冊。江戸中期書写。

(34) 青山学院大学日本文学研究室本（九一四・四二一・K一・一〇）

袋綴写本一冊。江戸中期書写。

(35) 岡山大学附属図書館本（池田文庫）（貫H8）

袋綴横本写本一冊。江戸中期書写。

(36) 静嘉堂文庫本（八一・六六）

袋綴写本一冊。「西行山家集」と合綴。江戸中期書写。

(37) 今治市河野美術館本（三三一・六二九）

袋綴写本一冊。宝暦五年の藤原敷淵の識語、書写奥書。江戸中期書写。

(38) 今治市河野美術館本（三三一・六三一）

袋綴写本四冊（春・夏・秋・冬）。江戸中期書写。第四冊目の奥に、明治十五年の岡本文行の識語。

(39) 無窮会神習文庫本（三九八九）

袋綴写本一冊。江戸中期書写。

(40) 実践女子大学図書館本（常磐松文庫）

袋綴写本一冊。「善本四季物語上」の題簽で、上冊のみで下冊を欠く。江戸中後期書写。

(41) 青山学院大学日本文学研究室本（九一四・四二一・K一・五）

袋綴写本一冊。「八条桂光院智仁親王御自筆本」の件。現在①②③なし。ただし、浅野論文では存在したとする。近年、最後の一丁が切り取られた形跡。江戸中後期書写か。

(42) 東京大学文学部国文学研究室本（本居文庫）

袋綴写本一冊。江戸中後期書写か。

(43) 東北大学附属図書館本（狩野文庫）（狩四・一一四〇）

袋綴写本一冊。安永七年夏六月下旬の書写奥書。つぎに寛政六年（二七九四）四月祭日の「大坂入江氏本」をもって書写したとの「法眼謙直」の奥書。

(44) 東京大学文学部国文研究室本（中世四一・三一二）

袋綴写本一冊。安永七年夏六月下旬の入江昌喜の書写奥書、次に寛政八年（二七九六）四月中旬付の北山遥瀬の書写奥書。

(45) 京都大学文学部本（国文学LM一六）

袋綴写本一冊。寛政九年（二七九七）の渡辺朗と松井蠅翁の書写奥書。

(46) 関西大学図書館本

袋綴写本一冊。安永七年夏六月下旬の入江昌喜の書写奥書、次に寛政九年（二七九七）三月の上田香宗の書写奥書。

(47) 京都大学附属図書館本（平松家文庫）（ク・シー四）

袋綴写本一冊。中開き中央に「飛鳥井羽林雅威朝臣筆」とある。巻末に安永九年（一七八〇）早春に「右武衛次将」の明日香井家藏本を借りて書写したとの識語。

(48) 青山学院大学日本文学研究室本（九一四・四二一・K一・四）

袋綴写本一冊。安永五年（清隠題）、正徳三年（屏陳窠）、享保四年（芝偶舎）、同八年（城北散人）、文化五年（大槻道慶）の書写奥書に続き、嘉永元年（一八四八）の原馨子の識語。

(49) 実践女子大学図書館本（黒川文庫）

袋綴写本二冊。文政九年（一八二六）七月二日の「源基とを」の書写奥書。

(50) 青山学院大学日本文学研究室本（九一四・四二一・K一・二）

袋綴写本一冊。文化十二年（一八一五）中秋の書写奥書。

(51) 東京大学総合図書館本（南葵文庫）（E二六・一〇七七）

袋綴写本一冊。文化十三年（一八一六）十月七日の書写奥書のほか、文政九年（一八二六）十二月二十七日、伴信友より一本を借りて校合したとの広庭の朱筆の識語。

(52) 実践女子大学図書館本（常磐松文庫）

袋綴写本二冊。文政十二年（一八二九）孟冬（十月）の書写奥書。

(53) 上田市立図書館本（花月文庫）

袋綴写本一冊。享保九年十一月（彦坂永俊）、明和八年七月二十九日（川上知直）の書写奥書について、文政十三年四月上浣の西村徳常の書写奥書。

(54) 無窮会神習文庫本（三九八七）

袋綴写本一冊。江戸後期書写。

(55) 京都大学文学部本（国文学Lmla）

袋綴写本二冊。宝暦五年の藤原敷淵の識語。江戸後期書写。

(56) 今治市河野美術館本（三三一・六二八）

袋綴写本二冊（上・下）。宝暦五年の藤原敷淵の識語。江戸後期書写。

- (57) 国立国会図書館本（八三七・二・一九）
袋綴写本二冊（上・下）。江戸後期書写。安永七年（一七七八）閏四月の識語。
- (58) 東京都立中央図書館本（加賀文庫）（一〇五二九）
袋綴写本一冊。江戸後期書写。
- (59) 実践女子大学図書館本（黒川文庫本）
袋綴写本四冊。第一冊（春）、第三冊（秋）が同筆、第二冊（夏）第四冊（冬）が同筆で二人の筆跡。江戸後期書写。
- (60) 実践女子大学図書館本（常磐松文庫）
袋綴写本一冊。江戸後期書写。
- (61) 実践女子大学図書館本（黒川文庫本）
袋綴写本一冊。「歌林四季物語」と合綴。宝暦五年の藤原敷淵の識語。
- (62) 青山学院大学日本文学研究室本（九一四一四二一K一八）
袋綴写本一冊。奥書③は付箋。「樟下亭藤原教武蔵書」。江戸後期書写。
- (63) 静嘉堂文庫本（八一・六六・一四九六八）
袋綴写本一冊。江戸後期書写。
- (64) 静嘉堂文庫本（八一・六六・一四九六九）
袋綴写本一冊。江戸後期書写。
- (65) 早稲田大学図書館本（へ・一〇・三五四五）
袋綴写本一冊。江戸後期書写。
- (66) 香川県多和文庫（五・一一）
袋綴写本一冊。江戸後期頃の「長酔月桃翁」の書写。朱筆で文政十三年冬、本居高国の校合。
- (67) 香川県多和文庫
袋綴写本一冊。(66)の転写本か。
- (68) 今治市河野美術館本（三三三・六三〇）
袋綴写本一冊。宝暦五年の藤原敷淵の識語の次に、天保三年（一八三二）二月十五日の菁蒙女の書写奥書。
- (69) 大和文華館本（鈴鹿文庫）（八・六〇一九）
袋綴写本二冊（天・地）。奥書①②のみで③がない。筆跡より幕末の鈴鹿連胤筆とされる。
- (70) 京都大学文学部本（国文学・A一・一八）

- 袋綴写本一冊。宝暦五年の藤原敷淵の識語。天保四年（一八三三）三月二十八日、伴信友の書写。
- (71) 京都女子大学図書館本（吉沢文庫）（Y九一四・K・一二一）
袋綴写本一冊。宝暦三年（度会正身）、宝暦五年（度会未雅）、寛政十年（度会助侑）の書写奥書に続き、天保十年（一八三九）六月の「清継」の書写奥書。
- (72) 九州大学附属図書館本（五四五・チ・一）
袋綴写本一冊。宝暦五年（藤原敷淵）、天保十二年（松木大成）の書写奥書に続き、万延元年（一八六〇）十月六日の橋爪正澄の書写奥書。
- (73) 東京大学総合図書館本（南葵文庫）（E二六・一〇一三）
袋綴写本一冊。江戸最末期〜明治初期書写か。

以上、写本系「四季物語」の諸本を書写年時を中心に概観してきた。このうち書写年時が明記されている写本で、一番古いものは、(3)陽明文庫の「元禄丙子」（九年）であり、それ以前のものは見出し得ない。それに続くものも、江戸初期頃の書写本は数本にすぎず、ついで宝永年間、正徳年間など、江戸中期頃のものが七本ほど、それ以外は、ほとんど享保〜天保頃にかけての江戸後期頃の書写になるものであった。

管見に入っていないものは、小川寿一、浅野日出男両氏の報告されたもの、あるいは古書売立目録類での写真版で見たもの、近年翻刻された長崎健氏所蔵（元禄頃書写という）など十数本があるが、いずれも江戸初期以前の書写本は見出し得ていない。

そのような状況のなかで、(1)東京大学総合図書館蔵の「四季物語」（南葵文庫）は、二つの点で注目される（諸伝本を博搜してきた浅野氏は「南葵文庫」の写本の他の三本を調査しているが、なぜか、この本の調査を行っていない。「貴重本」として別扱いになっていたためだろうか）。一つは諸本中で最も書写年時が古いこと、二つめは、奥書①②だけで、③の三好長慶の奥書がないことである。この事実には、「四季物語」の成立に示唆を与える面もあるので、この南葵文庫を書誌的な面も含め、やや詳しく紹介しておきたい。

該本は袋綴写本一冊。縦十五・三厘、横二十三・五厘の横型本。改装表紙の次に、茶色無地の原表紙があり、左肩に「永享^{（永享）}古^{（永享）}本^{（永享）} 鴨長明著 全」という題簽を貼付。虫損がかなりあり、裏打がなされている。一面十二行書で墨付七十四丁。

墨筆で所々に出典注記などもみえる。問題の書写年時であるが、題簽の「永亨古写本」の指示は、雅世の奥書に依拠したもので、その時期よりはかなり下るものではあるが、室町最末期頃とみてよいのではなからうか。その点、これまで調査した諸本中の最古写本である。しかも奥書は三好長慶のものがなく、為定・雅世のものだけである。この奥書①②③は、東北大学本でもって先掲しておいたが、少し異文もあるので、改めて南葵文庫本の奥書①②を次に摘記しておく。

右一部十二卷者鴨長明／所撰之四季物語也日二月二／雖求之被秘于箱中被／封於藏裏無入手裏偶／依懇望自官庫潜取／出之写之早今度之撰／中之規模宝用有之而已／右可秘者也

応安元年戊申十一月十六日

藤原為定／写所之

長明四季物語十二卷／我家之袖玉不可越者也／尤永可伝永授秘本也

永享十年九月下旬

中納言藤原雅世

このように、他のほとんどの諸本にみえる「永禄元年十二月上旬」の三好長慶の奥書がないのは、なぜであろうか（諸本のなかには、(8)広島大学本のように、奥書①②③のないものもあるが、これは奥書を省略したまでのことである。また、奥書③だけを欠くのは、他に(20)河野美術館本、(66)大和文華館本もあるが、江戸後期の書写本である）。

一つ想定されるのは、奥書①②までが「四季物語」の作者が捏造したもので、奥書③は実際に三好長慶が永禄元年十二月上旬に「四季物語」を入手して書写したということである。この想定が正しいとすれば、「四季物語」の成立は、永享十年以降、永禄元年以前ということになる。

長慶（大永二年（一五二二）～永禄七年（一五六四））の奥書も「眉つばもの」⁽¹⁵⁾との見方もあるが、永禄元年（一五五八）は、彼の三十七歳のときにあたり、その年の十一月、義輝と和して京都にいたので、奥書に特に矛盾や不審な点はない。しかも、戦国武将としての長慶は、一級の文化人であり、特に和歌・連歌にも優れ、書籍の収集にも務めていた人物である。⁽¹⁶⁾

長慶の奥書の内容も「雖然詞原章段出不詳、読之如失途」などと、専ら珍

重さを強調する奥書①②とは、やや性格を異にし、「四季物語」の原作者の捏造とは思えない調子がある。

中村幸彦氏は、「四季物語」の成立を、西紀一四〇〇年後半以後と推測されたが、享徳元年（一四五二）に死没の雅世の奥書を捏造とすれば、彼の死後、ある程度経過してから加えられた可能性がある。それに後述するように、「徒然草」を撰取している形跡があることから判断し、「徒然草」がある程度流布して親しまれていることも考慮すると、西暦一五〇〇年前後成立も、一つの仮説として提出できるのではなからうか。

ともあれ、「四季物語」は、諸本の書写年時からみても、「徒然草」以前の古写本などではなく、室町最末期が最古の書写本であることも、偽書であることの状態証拠の一端にはなるであろう。

近年、古筆切の研究は盛行しているが、「四季物語」の古写本の古筆切の報告を仄聞したこともない。現存の写本系「四季物語」の成立は、「徒然草」以降とみなしてよく、そのことは、次の考察によっても、自ずから明瞭になると思う。

三 「四季物語」偽書作成の手法

写本系「四季物語」が鴨長明の真作ではなく、後人による偽書であることは、これまでの先学の様々な問題点の指摘や伝本流布状況などからみて、ほぼ間違いないところである。

しかもその成立時期は、「徒然草」よりも遙かに後であり、むしろ「徒然草」に偽書作成の端緒を得て、その表現なども撰取して成立したものであろうことを、以下で論及してゆきたい。

長明作に仮託した「四季物語」を作成する契機になったのは、「徒然草」第百三十八段に着目したことによるとみなしてよい。

ここでは、両作品の関連する文章を、上・下段に対照して比較する。「四季物語」の本文は、先に紹介した現存する一番古い書写の東京大学総合図書館南葵文庫本に依拠するが、適宜、漢字宛、濁点、句読点などを付し、読み易い校訂本文で示し、幾本かの諸本との異同のうち、主要なものを括弧を付して示した。⁽¹⁷⁾

さて、偽書作成の契機となったと思われる「徒然草」第百三十八段と、それ

に対応する「四季物語」を対比する。

「徒然草」(第百三十八段)

「祭過ぎぬれば、後の葵不用なり」とて、或人の、御簾なるをみな取らせられ侍りしが、色もなく覚え侍りしを、よき人のし給ふ事なれば、さるべきにやと思ひしかど、周防内侍が、

かくれどもかひなき物はもろ友にみすの葵の枯葉なりけり

と詠めるも、母屋の御簾に葵のかかりたる枯葉を詠めるよし、家の集に書けり。古き歌の詞書に、「枯れたる葵にさしてつかはしける」とも侍り。枕草子にも「来しかた恋しき物、枯れたる葵」と書けるこそ、いみじくなつかしう思ひ寄りたれ。鴨長明が四季物語にも「玉だれに後の葵は留りけり」とぞ書ける。己と枯るるだにこそあるを、名残なく、いかが取り捨つべき。(後略)

「徒然草」は、四月の葵祭に御簾にかけていた葵を祭が終了すると、すぐに処分してしまったある人の行為に対し、「周防内侍集」「枕草子」、鴨長明の「四季物語」にみえる、枯れた葵をそのままにしている歌や記事を引用して不審を表明した考証的な章段である。

その「徒然草」と、葵祭の条にみえる「四季物語」のそれを対比してみると、「四季物語」は「玉垂に」の歌を一首、完全な姿で引用し、しかも和泉式部が小野の大将に忘れられたときに詠じた歌だと詠歌の背景まで説明している。

この部分だけを比較すると、「四季物語」↓「徒然草」は想定されても、その逆のケースは成り立ち難いとみるのが普通であろう。

けれども、「四季物語」が引用する「玉垂に」の歌は、和泉式部の家集類に見出されないだけでなく、『新編国歌大観』にも収録されていない。出典が「小六帖」だとするが、「古今六帖」にもなく、また、そんな名称の歌集も現存せず不審である。さらに和泉式部と小野の大将の話も、説話的な要素を湛え、

「四季物語」(四月)

小六帖の歌に、和泉式部、小野の大将にわすら(れ)まいらせて、又ことかたのうへ宮人になれ物し給ふを、まのあたり見るがわびしきにと、うち腹立ちて、水無月の中の七日の夕さりかた、御階のうへの高欄に、わらはべの御簾にありしをとうでて、かなぐりふてたりし葵の枯葉に添へて、少将の内侍のがり行くにこづけて、いひやりけるとなん

玉垂(に)後の葵はとまりけりかれてもかよへ人の面影といへるぞかし。

もつともらしい詠歌状況を記すが、内容もすっきりしない面がある。

「四季物語」を偽書とみると、これは「徒然草」引用の「玉だれに後の葵は留りけり」が、偶々、五・七・五になっているので、一首の和歌の上句と受けとり、下句を創作して一首の和歌に仕立てたのではないかという仮説も想定される(歌は、「かれても」に「枯れても」「離れても」をかけ、一応、歌意は成り立つが)。そして、それが「小六帖」という作品にある和泉式部の和歌だと詠歌状況まで付加し、「徒然草」が参看した長明の「四季物語」らしく捏造したのではなからうか。

その偽書作成の方法として注意されるのは、引用の一部を一首の和歌に仕立て、その歌の出典と作者を明示し、より具象的にして真実めかしていることである。が、先述したように、その和歌も作者も出典も不審なものばかりなのである。

なお、「歌林四季物語」は、この部分は、写本系「四季物語」と関連するが、そこでは、

葵かづらはかれゆくまでも久しくかけをかれて、かうぐしく相見えたり。よつて古六帖のうたに、

玉だれにのちのあふひはとまりけりかれてものこれ人のをまかげとよみしも、あはれふかくおほひたり。

(続類従本による)

とあり、和泉式部の話は記されていない。次に関連するのは、正月八日から七日間、宮中の真言院で行われる、後七日の御修法に武士が警護するようになったことに関する意見である。

「徒然草」(第六十三段)

後七日の阿闍梨、武者を集むる事、いつとかや盗人にあひにけるより、宿直人として、かくことしくなりにけり。一年の相は、この修中のありさまにこそ見ゆなれば、兵を用ゐん事、穏やかならぬことなり。

「四季物語」(正月)

大治二とせの御修法に、ぬす人多く群れ入りて、夜居の僧・阿闍梨などの衣、あるは仏の具奪い取りしより、御修法のたびには、宮の中に、六衛府のつかさ人、検非違使の下人など、弓・やなくひを備へ、かがり・あかしともして守れるに、さかし。さやうのあせものは来まじ。

兼好は宮中で行う正月の荘厳な仏事に、いかめしい武士が警護することを不穏だと批判する。その機縁になったのは、この仏事の際に、盗人が乱入して以

来だとするが、それを「いつとかや」と年時確定を行っていない。それに対して「四季物語」は、その盗人乱入事件は大治二年（一一二七）の時と特定し、その時の状況などを詳しく説明する。従って、「徒然草」の諸注釈書の多くは、これに依拠し、「いつとかや」は大治二年のことであったことがわかれるとする。けれども、この関連記事は、少しく冷静に考えれば、「四季物語」の記事をそのまま信用できないことになる。

むしろ、「四季物語」の作者は、「徒然草」の「いつとかや」に着目し、さしたる根拠もないのに「大治二年」と特定し、よりその時の状況を詳細に記して偽作したと推測される。

考えてみれば、兼好は長明作という「四季物語」を繙読するだけでなく、先掲した第百三十八段の枯れた葵をそのままにしていることの証拠として、本文「玉だれに後の葵は留りけり」と引用しているのである。その方向に即すれば、「いつとかや」といった漠然とした記し方をせず、「四季物語」に依拠し、「大治二年」と明記していてもおかしくないはずである。これは同時に、兼好の繙読した「四季物語」は、現存の写本系「四季物語」とは別の作品であったことを暗示している。

しかも、大治二年の御修法に盗人が乱入したということは、史実として確認できない。すでに「評釈『四季物語』——正月——」¹⁸にも、大治二年の御修法の記事がみえる「中右記」や「東寺長者補任」などにも、全く盗人乱入という大事件が触れられていないのも不審であるとしている。

どうやら、「四季物語」のこの記事は、作者による捏造の可能性が濃いことになる。そして、その偽作の作成は、「徒然草」の「いつとかや」に着目、それに「大治二年」という年時を特定し、状況を具体的に記し、より史実性、真実めかすという手法でなされたと思量される。

次は、「つれづれわぶるひとは、いかなる心ならん。まぎるるかたなく、ただひとりあるのみこそよけれ」と書き始められ、死期の近いのを忘れて、右往左往する人間の愚かしさを批判する章段の部分である。

「徒然草」(第七十五段)

世にしたがへば、心、外の塵に奪はれて惑ひやすく、人に交れば、言葉よその聞きに随ひて、さながら心にあらず。人に戯れ、物に争ひ、一度は恨み、一度は喜ぶ。その事定まれる事なし。分別みだりに起りて、得失止む時なし。惑ひの上に酔へり。酔の中に夢をなす。走りて急がはしく、ほれて忘れたる事、人皆かくのごとし。(後略)

「徒然草」と「四季物語」の傍線部分は、ほぼ一致し、その影響関係が想定される。¹⁹

ここも単純に比較すれば、これまで同様、傍線部分の出典を、都良香の「古墓の記」であるとすると「四季物語」の方が先に位置し、「徒然草」はそれを摂取したもので、その逆は考え難いように思える。

ところが、都良香の「古墓の記」なる作品の存在は確認されていない。彼の漢詩文を集成したものに、「都氏文集」があるが、念のため、国立公文書館内閣文庫本（慶長写、三冊）（林恕等写、補遺二冊）に当たってみたが、「古墓の記」も、また傍線部のような表現を駆使した漢詩文も見出し得なかった。

してみると「四季物語」の作者は、「徒然草」の第七十五段の、短文を小刻みに連ねてゆく、漢文調の表現に着目し、存在もしない都良香の「古墓の記」を持ち出して偽作した可能性が濃厚である。ここでの偽書作成の手法も先の葵の枯れ葉の条と同様、「徒然草」の傍線部がいかにも出典を有するものであるかのように、具体的に作者と作品を特定するものであった。

あと一つ、人間の愚劣さを、利欲に惑う愚かしさ、名譽を求める愚かしさ、知徳を願う愚かしさの三段階に分け、最後に「万事は皆非なり。言ふにたらず、願ふにたらず」と絶望的に結ぶ「徒然草」の章段の冒頭部分を取りあげ、「四

「四季物語」(七月)

都の良香と聞こえし人の古墓の記にも、凡情雲なるは、鶏牛犬馬よりもをとり。ただ世路につかはれて、惑ひの上に酔いをなし、酔のうちに夢をなし、夢のうちに死をなすとかものせしごとく、たれもくやがて玉になるべきを、我は人を祭り、また祭らるることほりしらぬ人情のあさましさ、いふも更也。

季物語」と対比してみる。

「徒然草」(第三十八段)

名利に使はれて、閑かなる暇なく、一生を苦しむるこそ、愚なれ。財多ければ身を守るにまどし。害をかひ、累を招く媒なり。身の後には金をして北斗をささふとも、人のためにぞわづらはるべき。

(後略)

「四季物語」(八月)

この月のくまなき空には、あるは南面のみかうしとらせばや、御酒たてまつるかぎり、酔の中に秋を忘れ、(中略)淡路嶋山の月は色は、金にして北斗をささふるがごとしと匡房のぬしのものせしも、さる事成べし。

ここも一読すると、「徒然草」の傍線部は、「四季物語」の大江匡房の漢詩文を典拠にしているようにみえる。けれども、現存する匡房の漢詩文に、できる限り当ててみたが、まだ該当するものを見出し得ていない。これも、先の「惑ひの上に酔へり、酔の中に夢をなす」に着目し、それが都良香の「古墓の記」に依拠したと仕組んだ偽作の手法と同様なのではなからうか。特にこのケースは、兼好が依拠した出典が、「白氏文集」(巻二十一)の「勸酒」の「身後^{ニハ}堆^{レシ}金^ヲ拄^{フトモ}北斗^ヲ不如^{ニハ}生前^ノ一樽^ノ酒^{ニハ}」であることは、波線部の「身の後には」から判断しても明瞭なのであり、「四季物語」の匡房作という漢詩文とは関わりがない。「四季物語」の作者は「金をして北斗をささふ」という奇抜な比喩に着目、これが漢詩文調であることを見定めたまではよいが、その出典が「白氏文集」であることに気付かず、匡房の漢詩文を捏造し、「徒然草」がいかにも「四季物語」に依拠したように仕組んだと思われる。

以上、「徒然草」と「四季物語」とを、共に関連する共通事項、類似表現に着目して対比してきた。

そこで明瞭になってきたことは、「四季物語」が様々な作為を施して、いかにも「徒然草」に先行する作品であること、しかも、そこから「徒然草」が種々の記事や表現を摂取していることを強く印象付けるように仕組んでいるということであった。

その具体的な手法としては、「徒然草」の引用した表現を、和歌一首に仕立てて、和泉式部の作としたり、「いつとかや」という不明確な年時を「大治二年」と特定したり、漢詩文調の表現に着目し、わざわざ都良香や大江匡房の漢詩文(出典未詳)と関連をもたせようとするものであった。またそのいずれもが史実に確証を見出し得なかったり、特定された歌人や漢詩人の作品の出典な

ども確認できないものであった。その状況判断によっても、その所為が捏造と偽作であったことを露呈しているように思われる。

なお、「四季物語」の偽書説は、これまで主として、嘉祥の祭とか大文字の送火など、年中行事の起源の不審などに着目して展開されることが多かったが、ここで試みたように、引用された和歌や漢詩文などの出典未詳(他にも、山上憶良や在原棟梁の和歌も出典未詳)の方向から論及してよいであろう。

それはともあれ、現存の写本系「四季物語」は、兼好が繕読した「四季物語」とは別の作品であり、むしろ「徒然草」の第百三十八段の「鴨長明が四季物語にも」に着目して、様々な工夫を凝らして、それらしく偽作したものとなしてよからう。そして、ここで検証したような偽書作成の手法を駆使しているが、それがいずれも「徒然草」を意識して、意図的になされている事実に変更が加えられる。

このことは同時に、「四季物語」には、他にも「徒然草」と関連する事項や表現が見出されるであろうことを予測させるが、次にはそういった関連箇所に触れてみたい。

四 「徒然草」から「四季物語」へ

「徒然草」と「四季物語」の類似した事項、表現は、先に検討した四項目以外にも多数見出すことができる。そのことは「徒然草」の諸注釈書でも幾箇所か、また、島内裕子氏の論考では、さらに詳細に指摘されている。以下に触れるものも、それと重なるものも多いが、新に見出したものも加え、島内氏のよいうに「四季物語」の月別でなく、自然描写、年中行事、人生観、人間観、説話、出典、語彙などに区分し、対比してみたい。

まず「四季物語」自然描写から。

正月の自然描写に大晦日の夜のことがみえ、やがて「鳥も聞えぬ山里なれど、家を守る犬の声くも春めきたるやうに覺いて、ひんがしのとざし、しばしばかり明けものすれば、空の気色夜(べ)見しにかはりて」という傍線部の、一夜明けた元旦の空の変化の描写は、「徒然草」第十九段の「折節の移りかはるこそ、ものごとく哀なれ」の末尾の、「かくて明けゆく空の気色、昨日にかはりたりとは見えねど、ひさかへめづらしき心地ぞする」の、心情で空の変化を感じる部分と類似する。この同じ描写手法は、六月の条に「閑伽奉り、花たう

べんとぞ、目すり／＼うちむかへば、昨日の空には気色かはり、雲うちおほひ……」にもみてとれる。

また四月の条の、次の日野の山里の月夜の描写も注意される。

月はいつとても晴れたるは艶なれど、また隈なきもゆきつまりたれば、この日野の山里の月の夕べ、有明のたたずまひ、稀なる旅寝さへあはれ深かるべきに、まいて年比の住家に見なれむかひ侍(り)し夕べ、暁、身にしむばかりのこの比の空、秋はさらなることほりなるを、⁽²⁾青葉・椎・白樫の木の間がくれば、心知らぬ都のてふりには、かういひつづくるもはしたなかるべきとなり。

傍線(1)は月を人生と絡めた「徒然草」(第八十三段)の「月満ちては缺け、物盛りにしては衰ふ。万の事、先のつまりたるは、破れに近き道なり」と関わり、表現的には「秋の月は、限りなくめでたきものなり。いつとても月はかくこそあれとて、思ひ分かさらん人は、無下に心うかるべき事なり」(第二百十二段)と類似する。傍線(2)は、著名な「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは」の章段の、「望月のくまなきを千里の外まで眺めたるよりも、暁ちかくなりて待ち出でたるが、いと心ぶかう、青みたるやうにて、ふかき山の杉の梢に見えたる木の間の影、うちしぐれたる村雲がくれのほど、またなく哀なり。椎柴・白樫などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしてみて、心あらん友もがなと、都恋しう覚ゆれ」(第三百三十七段)の表現と情景に近似し綴れ折りのように摂取していると思われる。

さらに、「四季物語」の八月の条の末尾の、「ただ世をやすらかにかきこもり、人とはぬ草ぶきの明くれに、目に見、心に思ふ事を、いはがねに語り、山の鳥のさえずりにこたふるばかり、心なぐさむ事はあらじかし」は、傍線部の類似も含め、「徒然草」(第二十一段)の「万のことは、月見るにこそ、慰むものなれ」の章段の末尾の「人どほく、水草清き所にさまよひありきたるばかり、心なぐさむ事はあらじ」という自然との接触で心が慰撫される心情と近似する。

「四季物語」の自然描写で、あと一つ留意されるのは、初冬の十月の条の「声／＼しきるうしみの頃はい、木の葉まれなる梢に、高くもさしのぼる月のかほ、(ま)ことに今もまもられ、古人を見る心地して、はだへも毛たつばかり悲しきあけほの、心あらん都の友なつかしうおほいぬ」であり、これは、先に引用した「徒然草」(第三百三十七段)の「木の間の影……身にしてみ、心あらん友もがなと、都恋しう覚ゆれ」と、一層、近似した描写となっている。

以上、「四季物語」の作者の住居と、そこから眺められる自然、天象に関わる空の気色、木の間から見る月光などの描写を、「徒然草」から切り取っているさまが窺える。

次に、「四季物語」の年中行事の記述に絡んだ事項や表現の方面から。

「徒然草」第十九段の「晦日の夜、いたう闇きに、松どもともして、夜半するまで、人の門たたき走りありきて、何事にかあらん、こと／＼しくののしりて、足を空にまどふが、暁がたより、さすがに音なく成りぬるこそ、年の名残も心ぼそけれ。亡き人のくる夜とて、玉まつるわざは、この比都にはなきを、東のかたには、なほする事にてありしこそ、あはれなりしか」の前半の大晦日の夜の行事は、兼好自身、「何事にかあらん」と不審がついているように、釈然としない。後半の年の終りの、亡き人の魂祭りは、「四季物語」の七月の条に、「なき玉祭る事は、一とせにあまた度ある物から、わきてこの月の祭は、年の終り(より)もいやそひて、かなしう思ひなさるるに」と関連する。故人の魂祭りは、一年に幾度かあったというが、中世以降は、専ら七月の盂蘭盆の行事が固定して現代に至る。「四季物語」の記述は、年末のそれよりも、七月の方が盛んだと、その趨勢の初期を窺わせるという。⁽²⁰⁾確かに、平安時代に京洛で十二月晦日に、亡き人の魂祭りのあったことは、和泉式部の歌(後拾遺集・哀傷)で確認できる。けれども、兼好の時代には、都ではすでに催行されなくなっており、関東でそれを体験したと記している。

この魂祭りの行事の記述を比較すると、大晦日の夜の魂祭りが、まだ残っていたとする「四季物語」の方が古い作品のように思える。が、この行事記事も、これまでの偽書作成の手法からみて、「徒然草」の第十九段の傍線部分を意識し、それより古いもののように偽作したのではなからうか。

なお、傍線部の「足を空にまどふ」という特異な表現は、「源氏物語」(夕顔)の「あしをそらにて思ひまどふ」に類似するが、「四季物語」正月の条にある、七日の御会(白馬の節会)が過ぎた後の、「法の師だつも、今日は御階によるほひ、若きかぎりは足を空になにくれと、その事をつかふまつれり」の傍線部の描写は、「徒然草」に依拠したものだろう。

さらに、「四季物語」の四月の条には、島内氏の指摘にもあるように、葵祭の行事を中心に記述され、やがて、その賑わいから一転して、生死無常を述べる展開が、「徒然草」第三百三十七段の構成と近似し、表現的にも事項的にも両作品は共通するところが多い。

例えば、「大路のさまは、何くれの見物数つどひて、大方は、夜の明けぬ比より、夕ざりは星をいただきて来ぬ」とか「つとめて後宴とて、……いづれかひとりとして、生き残れるもなければ、此の人数の古塚、いかなるは山しげ山をきりつくして、大方は野にも（ふ）て、水にも流すにこそ」の情景描写や人間の生死に関わる思念は、「徒然草」第百三十七段の「大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ」とか「かの棧敷の前をこころ行き交ふ人の、見知れるがあまたあるにて知りぬ、世の人数もさのみは多からぬにこそ。この人みな失せなん後、我が身死ぬべきに定まりたりとも、ほどなく待ちつけぬべし」と通底するものがある。

また四月の条の「放免の下人の袖たもにつけたる鞠づくし、秋の花垣百なり瓢の薄になりたるなど、けしからぬ見物なるに」も、「徒然草」第百二十一段の「祭の日の放免のつけ物」の章段を想起させる。

さらに、「(葵の葉を)」あるは御簾の帽額にはさみ、あるは母屋中殿の鴨居などにかけおかれぬ。五月のあやめ、葉玉のありかにもまじへおきて、なお長月の菊の折にもあふ事也。枯れたる葵、かつらも、あたらしきよりは、かうくしくおほいたり」も先掲した「徒然草」第百三十八段の、周防内侍の歌の詞書に「母屋の御簾に葵のかかりたる枯葉を詠める」とあったこと、「御帳にかかれる葉玉も、九月九日、菊に取りかへらるるといへば、菖蒲は菊の折までもあるべきにこそ」と非常に酷似した記述となっている。

これらは、年中行事に関わる記述なので、近似するのは当然だとみなすこともできるが、これまで辿ってきた両作品の関連からみて、「四季物語」は、「徒然草」の記述を念頭にし、模倣、摂取していると思量される。

次には、人間観・動物観・為政論など思想に関わる方面から。

「四季物語」二月の条は、二月の空の様子、残雪に咲きまじる梅の匂いなどから書き始められ、ついで檻の獣や籠の内の鳥について、次のような感慨を記す。

御曹司にこめたる檻の内の獣、籠の内の鳥は、春とも知らず、花に巣くう妹背の契りものせで、御垣が原の明暮、心苦しう、遠き海山、八重立つ雲のよそをも、恋ひ悲しむをなん、あはれと聞き知るべき聖ものせねば……

これは即事に、「徒然草」第百二十一一段の「走る獣は檻にこめ、鎖をさされ、飛ぶ鳥は翅を切り、籠に入れられて、雲を恋ひ、野山を思ふ愁、止む時なし。

その思ひ、我が身にあたりて忍び難くは、心あらん人、これを楽しまんや」という、籠や檻にとじ込められた鳥や獣の苦痛を、我が身に引き当ててみよという、慈愛の精神を述べた章段と、思想、表現が酷似し、摂取関係が想定できる。

また三月の条には、次のような東国人と都人との比較論を述べている。

あづまの人の心は、大方獣のやうに覺いたり。さはいへども、かへりては、かなしき心ざしをつくし、命にも身にもかへて、人をも救ひ、あまた眷族引き従へて、あだをも助けためりし事など、人も言ひ伝へ、近う目にもみそなはしぬれば、都とても、田舎恥しうこそ。ただ花紅葉につけ、月雪の庭にたたずみて、心とく折りにあひたることくさ、言ひもしろひ、よみいだす事なん、都の人はまさりぬ。ともかうも語らふ(べ)きは田舎うどなるべし。

ここの「徒然草」第百四十一段に記される、かつて東国武士だった堯蓮上人の、東国人と都人との比較論を連想させる。もともと、堯蓮上人は、故郷人が「吾妻人こそ、言ひつる事は頼まるれ。都の人は、ことうけのみよくて、実なし」と批判したのを受け、自分は長年都に住んでみるに、都人は「なべて心柔かに、情」があると擁護し、東国人は「心の色なく、情おくれ、ひとへにすぐよかなるもの」と批判しているので、都人は風雅心では勝れているが、東国人の我が身を捨てても人を救う行為を賛美する「四季物語」の論調とは、必ずしも一致しない。けれども、ここは「徒然草」の東国人と都人との比較論に触発され、先のような人間論を展開した可能性がある。

また、「四季物語」十一月の条には、豊の明りの節会の行事の後に、老人と若人の比較論が記され、やがて、次のような色欲の戒めが記述される。

若き時は心あはく、血氣盛んなれば、色深く思ひとり、⁽¹⁾さらぬ匂ひもうつりやすく、女の色にめづるはさる物にし(て)、⁽²⁾ただ後はおおしかる物から、いと(き)なき児にも、深う心をやりぬ。比叡の山住・笙の岩屋の聖だつ物は、女にうとければ、室の戸のすさみともなるを、おほやけつかうまつり、⁽³⁾おもつべき若人、古き人もすきくしきは、此色に迷ひぬ。⁽⁴⁾(中略) 此ひとつの外の色は、たださかりもひさしからず、契りの深かりぬべうもあらぬことなるを、いひしらずも好けるあいなさ、いはんかたなし。かへりては、仏の御罪おひぬべし。いとときなき心づからは、何かはおもはん。かたみに色にそみ、情にめでこそ、⁽⁵⁾此道の迷ひは重くも深

くもあるべし。

これも傍線部(1)は、「徒然草」第百七十二段の「若き時は、血氣うちにあまり、心、物にうごきて、情欲おほし」に、傍線(2)は、「徒然草」第八段の「匂ひなどは仮のものなるに、しばらく衣裳に薫物すと知りながら、えならぬ匂ひには、必ず心どきめきするものなり」という類似的表現に通底する。傍線部(3)(4)(5)の色欲の迷いも、「徒然草」の「まことに、愛著の道、その根ふかく、源とほし。六塵の楽欲おほしといへども、皆厭離しつべし。その中に、ただ、かの惑ひのひとつ止めがたきのみぞ、老いたるも若きも、智あるも愚かなるも、かはる所なしとみゆる。(中略)みづからいましめて、恐るべく慎むべきは、この惑ひなり」(第九段)、「世の人の心まどわす事、色欲にしかず」(第八段)などと、色欲の惑いを説く意見や表現と近似し、その関連が想定される。

そのほか、「四季物語」七月の末尾に「ただ鸞輿属車に国の粟をついやし、宮殿樓閣の塵をなん、民の汗にてあらはせ給ふ。あさましき世の中、松の思はんことも恥しうこそ」と華美や贅沢にはしる政治批判を展開しているが、これなども「徒然草」第二段の、「いにしへのひじりの御代の政をも忘れ、民の愁国のそこなはるるをも知らず、万にきよらを尽くしていみじと思ひ、所せきさましたる人こそ、うたて、思ふところなく見ゆれ」などをはじめとする、民衆の上に立つ為政者の贅沢を批判する論に通うものがある。

さらに九月の条の重陽の菊酒を飲んだ後の生態を描く、次のくだりも留意される。

好まぬかたは、皆薬師の印相を結んで、しづくばかりいただき心むるに、⁽¹⁾上戸はまが(り)していくたびもかたぶければ、後は、いつか千歳を我は経にけんやうに、⁽²⁾あとさき知らで、その日は高欄のかくれなどにくち臥して、はてはあさましう酔い泣きひとりごちぬ。⁽³⁾酒は憂ひをのがるものなれど、罪の深さいはむかたなし。

この深酒をした人の醜態の描写は、「徒然草」第百七十五段を連想させる。そこには、「すずろに飲ませれば、うるはしき人も、忽に狂人と成りてをこがまし、息災なる人も、目の前に大事の病者となりて、前後も知らず倒れ伏す」「或はまた、我が身いみじき事ども、かたはらいたく云ひ聞かせ、或は酔ひ泣きし」と、傍線(1)と近似の醜態が描写されている。さらに、「(酒は)百葉の長とはいへど、万の病は酒よりこそ起れ。憂忘るといへど、酔ひたる人ぞ、過ぎにし憂さをも思ひ出でて泣くめる」と、傍線部(3)と共通する思念もみえ

る。

なお、傍線部(1)にみえる「まが(り)」は、ここでは酒を飲む盃のようだが、すでに島内氏も指摘しているように、「徒然草」第百段に、久我相国(久我通光)が殿上で水を飲むのに「まがり」で飲んだという容器と同じである。この「まがり」は、他の文献にあまり用例のないもので(「宇津保物語」(蔵開下)にはみえる)、どんな容器か未詳で諸説がある。「四季物語」が、こんな特殊な容器「まがり」を取り込んでいるのも、「徒然草」との関連の深さを示唆しているよう。

ついでにいえば、「徒然草」第百五段にみえる「かぶし・かたちなどいとしと見えて」の「かぶし」も諸説あって不明だが、「四季物語」十一月の条に、「烏帽子打ち傾き、かぶし・かたちおかしき物なるべし」と同様な表現がみえるのも看過できない。「四季物語」と「徒然草」との関係は、このような特殊な物や語彙にまで及んでいることを改めて確認すべきであろう。

次には、巷説・説話の類の関連から。

「四季物語」二月の条に、猫が釈迦涅槃の際にやって来なかったことに関わり、「仏の御国も(猫まといふ獣は、かたちは虎によそひて心は)ねぢけまがりて(中略)この国にても、ともすれば老いたる猫ま野らに住むなどは、人の子を奪ひ、あるは人の妻をかどはかして、むくつけきものなり」と、年老いた猫まが人の子を奪う話を記している。これは「徒然草」第八十九段の著名な、『奥山に猫またといふものありて人を食ふなる』と、人のいひけるに、『山ならねども、これらにも、猫の経上りて、猫またに成りて、人とする事はあなるものを』と云ふ者ありける」という「猫また」の巷説の実態を記した章段と関連がありそうである。

また「四季物語」三月の条に、女性の生き方に言及するところで、「小野小町は世にしさすらひて、誘ふ水ありて、人の国にて、むなしくなりしかど、女などは、わきて九重の内にて、ともかうも尼にもなりて、世をすぐすこそ本意ならめ」と、小野小町の漂泊の生涯と「誘ふ水」の歌に触れる。これは、「徒然草」第百七十三段の、小野小町の「哀へたるさま」を記した書物の検討がみえること、第二百四十段に「世にあり侘ぶる女の、似げなき老法師、あやしの吾妻人なりとも、賑ははしきにつきて、『誘ふ水あらば』など云ふを」と、小町の和歌を引用していることなどが、「四季物語」作者の執筆の際に、脳裡をかすめたかもしれない。

両作品の関連の最後に、出典の方面から。

これまで、「四季物語」を偽書と捉え、「徒然草」を念頭に、様々な捏造を加えて執筆されてきたと、いささか作品の内容を貶めるような筆致になった。けれども「四季物語」の作者は、年中行事などを知悉しているだけでなく、日本の古代の物語や「古今集」をはじめとする和歌にも精通した博識の人物であることは確かである。

ここでは、「四季物語」の出典としては、原出典があるが、直接的には「徒然草」に依拠していると思えるものを二つほど指摘しておきたい

「徒然草」第七十三段は、世に、「虚言（そらごと）」の多いことを論じた章段だが、その中に、「かつあらはるるをまかへり見ず、口にまかせて言ひ散らすは、やがて浮きたることと聞ゆ。また、我も誠しからずは思ひながら、人の言ひしまに、鼻のほどおごめきて言ふは、その人の虚言にはあらず」と記すところがある。この傍線部分は、諸注釈書も指摘のように、「源氏物語」帚木の巻の「心は得ながら、鼻のわたりおごめきて語りなす」（河内本）に依拠するとみてよい。ただし、青表紙本では「おこめきて」ではなく「おこつきて」とあり、異文があつて解釈も定まらない。ところが「四季物語」正月の条に「此養君の行く末かしづくらんと、身の上の老の幸、鼻のあたりをこめきけり」とあるのは、意味や表現から判断し、「源氏物語」を出典とするより、直接には「徒然草」から摂取したのではなからうか。

また、「徒然草」第二段に「法師ばかり羨ましからぬものはあらじ。『人には木の端のやうに思はるるよ』と清少納言が書けるも、げにさることぞかし」と「枕草子」からの引用がみえる。「枕草子」は伝本が多様で異文も多いが、ここに一番近いのは、従前から、前田家本「枕草子」で「思はん子を法師になさむこそ、いと心苦しけれ。同じ人ながら、烏帽子・冠のなきばかりに、木の端などのやうに人の思ひたるよ」に依拠したとされている。ところが、「四季物語」十一月の条にも、「清少納言のおもとの、木の端など思ひくたせし沙門の明けくれ」と同様な引用があり、これも、直接には「徒然草」に依拠したように思われる。ただし、それから少し後に「おもへばおもへば思はん子を、さやうのけしきばめるあたりにつかうまつらぬぞよき」と、「枕草子」の波線部と同一表現がみえるので、あるいは「枕草子」の原典に依拠した可能性もあり、この場合は単純には断定できない。

以上、「徒然草」と「四季物語」との類似する表現や思想などを、多方面から指摘してきた。「四季物語」の作者が、ここで指摘したものをすべてを「徒然草」から摂取したとか、あるいは執筆の契機にしたとは考えないが、その多くは「徒然草」から「四季物語」へ」という流れにあると思量する。

おわりに

現存の写本系「四季物語」が鴨長明の真作ではなく偽書であることは、これまで主として年中行事などの起源などをめぐって展開されてきたが、「徒然草」との成立の先後関係は、必ずしも明瞭でなかった。

本論考では、現存する写本群の書写年時も視野に入れて調査してみた。その結果、ほとんどが、元禄頃から江戸末期にかかるものであること、そのなかで唯一、室町最末期書写と推測される東京大学総合図書館蔵本（南葵文庫）を紹介し、奥書①②のみで、③を欠くことに着目し、「四季物語」は「徒然草」より遙か後代に成立した作品であらうと推測した。

しかも、その偽書作成の直接の動機となったのは、「徒然草」第百三十八段の「鴨長明が四季物語にも、『玉だれに後の葵は留りける』とぞ書ける」であったのではないかと推測し、両作品の四つの類似記事や描写に着目し、その偽書作成の手法を論及してみた。その結果、「四季物語」は、「徒然草」を念頭に、逆にそれに様々な典拠を与えているかのように仕組んだ様相も明らかになってきた。

そういった観点から、改めて「四季物語」を繙読すると、他にも、自然描写、年中行事、人間観、動物観など、多方面にわたり、「徒然草」に依拠したと思われる箇所が抽出できるのである。その点で「四季物語」は「徒然草」を摂取することによって成立した作品という見方もできよう。²¹

ただ、「四季物語」の作者は、「徒然草」が「四季物語」から多くの記事や描写を摂取したように仕組んでいるので、単純に「徒然草」を享受した作品とするのには問題が存するかもしれない。が、そういった偽書という枠を取り払ってみれば、屈折した姿を伴ってはいるが、「徒然草」の享受作品と位置付けてよいであろう。

〔注〕

- (1) 「群書類従」(巻四九五)。
- (2) 「解釈」(昭和六十四年一月)。後に『徒然草の変貌』収録。以下、島内裕子氏の論は、同書に依る。
- (3) 牧野和夫氏「『扶桑蒙求私注』を通して見た、二、二の問題——「日本名僧伝」その他のこと——」(東横国文学・第十七号、昭和六十年三月)。後に『中世の説話と学問』収録。
- (4) 「国史と国文」(第五巻・第五号、昭和三年十一月、第五巻・第七号、昭和四年一月)。
- (5) 第二十一号、昭和三十八年十一月、第二十六号、昭和三十九年四月。
- (6) 「國学院雑誌」(昭和五十五年八月)。
- (7) 「文学」(昭和五十二年八月)。
- (8) 『今井源衛教授退官記念 文学論叢』(昭和五十七年六月)収録論文。
- (9) 注(8)に同じ。
- (10) 「解釈と鑑賞」(昭和五十九年九月)。
- (11) 注(6)に同じ。
- (12) 「山陽女子短期大学研究紀要」(第八号、昭和五十七年三月、第九号、昭和五十八年三月、第十号、昭和五十九年三月、第十一号、昭和六十年三月)。ただし、この論文は、次号に記すとしながら、未完成になっているようである。
- (13) 注(8)に同じ。
- (14) 長崎健・新井理香・池田恵美子各氏「翻刻——『鴨長明四季物語』(第二類本系統)」(中央大学文学部紀要・文学科・第七十七号、平成八年三月)。
- (15) 中村幸彦氏「白太夫考——天神縁起外伝——」(文学・昭和五十二年八月)。
- (16) 長江正一著『三好長慶』(人物叢書)、今谷明著『室町幕府解体過程の研究』など参照。
- (17) 「続群書類従」(巻九四三)、『鴨長明全集』に翻刻の東北大学附属図書館本(狩野文庫)、注(14)の長崎健氏所蔵本など。
- (18) 尾坂隆之氏ほか。「中央大学国文」(第四号、平成九年三月)。
- (19) 島内氏は、「徒然草の諸注でこの箇所類似に注意したものは管見に入った限り見当たらないようだ」とするが、この関係は、拙著『徒然

草上・下』(ほるぷ出版、昭和六十一年刊)で指摘済み。

(20) 三木紀人著『徒然草 全訳注(二)』など。

(21) 注(2)の島内論文も、同様な認識をしている。